藤女子大学
藤女子短期大学

No. 14

図書館だより

'81. 12

聖チェチーリア音楽院図書館で

相　原　宗　和（音楽学）

12年前に，私は私立大学在外研修員として，一ケ年，ローマの聖チェチーリア音楽院に席を置いていた。

その時は，研究テーマの一つに「17・8世紀のイタリア歌曲の演奏法と資料収集」があったために，週に二度，教授の個人指導を受ける傍ら，努めて楽書店リコルディを訪れるか，あるいは音楽院の図書館で古い楽譜あさりをするのが日課であった。

当時，わが国の図書館には音楽関係，殊に私の専攻するイタリア古典歌曲に関する資料を有する所の皆無なこともあって，図書館にこもっての仕事など，私には考えられないことであった。

それゆえ短期間ではあったが，聖チェチーリア音楽院での体験は，今もって私の脳裏に鮮明に焼付いている。

聖チェチーリア音楽院は，その歴史を1566年にまでさかのぼることの出来る由緒ある音楽院で，現校舎は1876年に，ある修道院を改造したものとされている。

したがってその外観は，校門前を横切る古い石畳の歩道と溶け合い，一枚の絵を感じさせるものの決して立派なものではなく，むしろ星霜をへた普通の住宅と見まがうほどのものであった。

しかし，ひとたび足を校内に踏み入れると様相は一変する。中庭を囲む回廊，白い壁に高い天井，そこから垂れさがる古風な電灯等……，かつての修道院を彷彿させるものが散見される。そうした雰囲気の漂うなかに，古くから国内で発行されたあらゆる楽譜が，法によって集められているという図書館が併置されている。

しかし，それは図書館というよりは，むしろ図書室とよぶのに相応しいものであった。

ほの暗いなかにも，天井に描かれた見事な壁画，マホガニー色のずっしりとした机と椅子，席ごとに置かれた古めかしい電気スタンド…。

その一席に腰をおろし，かって作曲家レスピーギが，そしてピツェッティがこの部屋の何処かで，黙々とグレゴリオ聖歌や古いギリシアの音楽と取り組んだことに思いをはせるとき，また，1601年に刊行された，カッチーニの Le Nuove Musiche（最古の歌曲集）の初版本を手にとり，目で確かめるとき，私は，唯々，音楽を究める喜びに陶酔し，多くの時間をそこで費やしたのであった。

図書館をあなたのものに

入門読書あんない －国語国文学－

万葉集研究入門

中　山　周　三（国文学）

古代文学といっても，祝詞・宣命，古事記，日本書紀，風土記，万葉集，懐風藻その他など，その範囲は広く，どれ一つをとっても，膨大な註釈書，研究書，辞典，論文の類があり，限られた紙面での紹介は，困難である。

万葉集に限ってみても，手っ取り早い入門書には，古くは，沢瀉久孝の「万葉集序説」があって，多大の恩恵を蒙った。最近では，国文学関係の諸誌で，何年かおきに，同種の特集が繰り返し行われている。たとえば，「解釈と鑑賞」（昭56・9）に万葉集の特集があり，「国文学」（昭54・5）の別冊でも万葉集必携が，刊行されており，万葉和歌史や研究史，年表などが，要領よくまとめられている。同誌では，同名の単行本（昭42・8）も出している。このほか，「記紀万葉の謎」のような問題別の特集も行っている。

なお，研究の歩みを知る上では，「国語国文学研究史大成」の「万葉集」上・下（昭44）が便利である。さらに「万葉集大成」「古事記大成」のような大冊も刊行されている。

最近では，従来の訓詁・註釈の研究から，さらに文学的，文芸学的な研究も盛んに行われるようになり，これは喜ばしい傾向と言わざるを得ない。「万葉集講座」（昭47 有精堂）や「万葉集を学ぶ」（昭52 有斐閣）などの叢書も，若手の研究を収録し，その傾向を知るのに都合がよい。

こうした研究の傾向と歩調をあわせてか，斎藤茂吉ら「アララギ」の誌上合評を収録した「万葉集研究」上・下も岩波書店から復刊されている。茂吉の「万葉秀歌」上・下（岩波新書），土屋文明の「万葉集年表」，また注釈書であるが，その「万葉集私注」は，学者の果たし得ない文学的評価の上で，示唆に富む点が多い。

新書や文庫にも，北山茂夫の「柿本人麻呂」，川崎庸之の「天武天皇」など，歴史学者の立場からする検討を容易に見ることができ，参考になろう。それに民俗学者で歌人でもあった折口信夫の全集も，最近，中公文庫に入り，その「古代研究」や古代関係のユニークな研究を目にすることができる。犬養孝の「万葉の旅」三巻本も社会思想社の文庫本に入っており，万葉遺蹟の調査の良い伴侶となろう。この種のもので，土屋の「万葉紀行」正・続も秀れている。

専門的になるが，小島憲之の「上代日本文学と中国文学」や中西進の「万葉集の比較文学的研究」も，研究領域を拡大してゆく上で，注目される。

卒論やレポート執筆のばあい，はじめに問題を設定し，その焦点をよく見きわめ，それに添って関係の参考文献を読み，調査をしてゆく必要がある。その際，文学的，語学的，歴史的，民俗的な方法を雑然と混用せず，飽くまでも自己の拠点を明確にして，課題に立ち向ってゆくことが，肝要であろう。

平安文学のテキスト

藤　村　　潔（国文学）

初期の段階で芳賀矢一（1867～1927）が大きくかかわった近代国文学の文献学的方法は，日本古典全書（朝日新聞社）・日本古典文学大系（岩波書店）・日本古典文学全集（小学館）等によってその成果の商品化に成功し，現在なお新潮日本古典集成が刊行中である。こうした研究成果の商品化によって，日本の古典文学は手軽に，しかも一応安心して読めるようになった。

古典の大衆化であり，ある意味では学問の大衆化と言えなくもない。加藤周一の日本文学史序説や梅原猛の上代文学に関する発言を支えているものも，こうした近代国文学の業績である。国文学の非専門家のユニークな仕事が発表されて注目を集めると，国文学者は何をやって来たのかと冷やかな目で見られがちだが，ユニークな研究だけが他の研究と無関係に突出してくるわけではない。

日本古典全書や日本古典文学大系は頭注，新潮日本古典集成は頭注と傍注の併用だが，日本古典文学全集は全訳がついている。私が講読でよく栄花物語を使ったのは，栄花物語が全訳のついている日本古典文学全集に入っていなかったからだが，この栄花物語についても栄花物語全注釈（角川書店）全八巻が松村博司氏の手によって完成してしまった。

さて，古代後期の文学であるが，まず作品を読んでみなければならない。たとえば源氏物語の場合。これは上記のどのテキストで読んでも大きな差はない。どれも青表紙本とよばれる定家校訂の本文であるが，枕草子の場合は事情がちょっと違う。枕草子の伝本には雑纂本と類纂本とがあり，前者は更に三巻本と能因本とに分かれる。枕草子を能因本で読もうと思えば，日本古典全集本の枕草子を読めばよい。他はすべて三巻本である。能因本と三巻本では段序も違い文章も異なる場合が多い。三巻本で読む場合は，新潮古典集成本で読んでみてはいかが。連想の文学として枕草子を捉えるという新しい立場が評判になった校注である。

日記文学なども含めて散文文学を平安朝文学の精華とみれば，「物語の出で来はじめの祖」とよばれた竹取物語は，小さいが無視できない作品であろう。これも新潮古典集成本で読んでみることを勧めたい。附録の関係資料に，「斑竹姑娘」の全文が収められている。中国四川省西部で採集されたチベット族の伝承で，五つの難題が竹取物語のそれに殆ど重なるかとさえ思われる。大変おもしろく，竹取物語の研究という立場からは，甚だ厄介な新資料でもある。

和歌について言及する余白を，失ってしまった。竹岡正夫著古今和歌集全評釈（昭和51・右文書院）が再刊されたことだけを記しておく。古注七種を集成した一千頁を超える大著の早い再刊は，特記に値いしよう。同書は，短い序文がまたなかなかおもしろい。

古典小径

伊藤　敬（国文学）

戦後の新教育制度が三十年＝一世代を過ぎたところで，やや大きな教育課程改訂が実施された。来年度は，新課程による高校一年生が登場する。その改訂に見る一特色に，言語文化・古典の扱い方がある。小学校五・六年で「易しい文語調の文章」に親しませ，中学校で「親しみやすい古典の文章」を適宜用いて高校へと結ぶ。従前より一貫性の面が配慮され，「価値ある基本的な古典」という固苦しさが除かれた点は，望ましい改訂と言える。初等・中等教育が次第に復古の色合いを深めていることへの批判もあるが，まずは児童生徒の言語力や理解力に相応させ〝親しみやすさ〟を掲げたのはよい。

ところで，この改訂の成果のあがるのは，まだ数年後である。今の若い人々と日本の古典との結びつきはどうであろうか。札幌の書店数や売場面積が過剰とも言われているが，店じまいした書店の話を聞かない。購買力・読者の数値が高いのであろう。しかし，購い読まれる書の中に，日本古典の比率はどの程度であろう。通勤の往復の車中で，とくに若い女性たちの熱心な読書姿を見るが，よそめにふと見える限りでは，古典とおぼしきものを目にしない。この大学に学ぶ国文学専攻の学生にしても，自分の書架に何冊の古典を蔵しているか，恐らく他書との比は低いであろう。極言すれば，中学・高校での古典教育は，不毛だったと言える。

かりに，現況が以上のようだとすると，〝古典への親しみ・誘い〟はどうあるべきなのか，と居ずまいを正してみても，余り役立ちそうもない。以下に，こんなところから興味のいとぐ

ちがという程度の助言を記しておく。

何げなく，たまたま手にした古典がおもしろかった，こうしたことはそう期待できまい。古典を現代とのかかわりで読むのが一法であるがその意味では，いわゆる国文学古典学者のものでなく，評論家といわれる人のものに触れてみるとよい。今，机辺にあるものを例にすると，梅原猛『古典の発見』・杉浦明平『戦国乱世の文学』などがある。両書ともやや啓蒙的に書かれ，古典世界の深さと史的意味を教えてくれる。理解できるところでよい。その範囲で，一首の和歌，一篇のお伽草子への眼が開かれればいい。文化史と結ぶ，秦恒平の『女文化の終焉』『趣向と自然－中世美術論』も有益だろう。吉村貞司『愛と無常の美学』も，動乱期の作家像へ興味を引かせるかもしれない。

女流では，馬場あき子の『修羅と艶』『遊狂の花』『穢土の夕映え』など，題名に見られるごとき人間性・心理の深奥をえぐるものもある。

ただ，大切なことは，例示した書にとどまってはいけないことである。それは古典を読まないに等しい。それらに触発されて直接に原典を読むことだ。幸いに，種々の形で読みやすい書が，たくさん刊行されているのだから。

近世日本文学への入門についての考え方

青　木　正　次（国文学）

近世文学だからといって，他にない特別な入りこみ方があるわけではない，というのは本質的な指摘だが，人は最初から本質的に関わっていくわけではないし，そうできるわけでもないから，人それぞれ，各人固有の事情を抱えて対象に関わっていくその固有の仕方の中にこそ，その人にとって本質的な入りこみ方，つまり入門の本質的な課題が隠れているはずである。とすれば，入門の仕方を説かれてから入門するというのは，実はありうべからざる転倒だということになる。本当は個別な課題に深入りした度合に応じて，そのあとから反省的にしか，入門の仕方というような問題意識は，各人の上に訪れてきはしないのだ，ということになる。だから現実に入門書の類はそれに応じうる何らかの動機を内に包みこめた者にしか，はっとしてぐーというわけにはいかないので，入門書から入ろうと苦しまぎれにあさり回る追いつめられた凡人にとっては，大低面白くもおかしくもないしろものになってしまうのがオチである。

現に，入門書の説きつけを必要とする対象は一体だれなのかを想像すれば，身辺では卒業論文を控えた三・四年生というぐらいのことしか浮んでこないのが，自分の貧しい現実だ。何よりも当の自分がこの程度にしか案内を必要にした経験が思い出せないのだから。

デモシカ風に近世文学に取りつき，所詮近松だろうと芭蕉だろうと本当は知ったことじゃあないんだと思って疑わない以上，行あたりばったりに問題にぶつかったところで，それについて考えてまた考え，アイデアがでなければ，少しでも反面教師的にでもいいから刺戟してくれれば，手助けの役は果す，というくらいにしか書物を必要としない怠け者的態度を保っているからだと思う。

そういう眼からみれば，近世文学に入門しようなどという追いつめられた気を起した時は，もう入門書などという生ぬるい方法を待ってはいられないから，すぐに手あたり次第，文字どおり手に当り次第，作品を読むほかはない。まずは作品から読み始める。そしてこういう切羽つまった境地ではとても興味など持てるはずもないから，好き好きに感興にまかせて読むことはあきらめて，最初から理づめに読む。わからず面白からず，となれば投げすてるか，何とか面白がる方法はないか，あれこれ読みようを考えるか，どちらかにする。それでも入門書にこだわるというなら，窮すれば通ずるものかどうかあり余る概論書でも文学史でも，もっと手近に深刻な教科書でも開いてみればよい。自分でそれらのアカデミックな記述や態度に共鳴できるものがあると思う人はそのマネを立派にすればよい。そのうちに必ずその人の問題につき当

るときがくるからだ。しかし本当をいえば，目の前の生身の人間が信用できなければ，本の著者にたよっても奇蹟は起りはしないと思う。

思いつくままに

山　田　昭　夫（国文学）

明治文学から現代文学までの読書案内を，というのが当面の課題である。実のない雑文になりそうだが，お許しを乞う。

昭和ヒトケタ世代の私などがふと文学の世界にマナコを見開いたのは戦争末期の頃で，文学入門の手引書は河合栄次郎編の『学生と読書』という本であった。私はこの本にリストアップされている内外の名作群を手あたりしだい読破したいものだと思ったが，これでという本の入手難のために随分ひもじい思いをした。しかし，改造社の円本などは比較的集めやすく，その四十冊近くが今も書架の一隅にある。何から読んだらよいか。それは人生の偶然の一つとして人さまざまでよい。私の場合，教科書は除外するとして，小説ではじめて読んだのは，なんと菊池幽芳の『乳姉妹』。たまたま家にあったからにすぎない。古い古い明治の家庭小説なのだ。いたく感動し，真顔になって読んだ作品となると，島崎藤村『破戒』，友人と回読した島木健作『生活の探求』。円本では国木田独歩，志賀直哉，武者小路実篤，菊池寛，それに私と同世代者の共通項だと思える吉田絃二郎。明治のものでも，漢字は総ルビであるし，それほど抵抗感はなかったように思う。

現代はマスプロ時代である。大型書店に行くとめまいに襲われる。人工光線のあやなす色彩の散乱，売らんかな主義の本の意匠，その醜悪美に疲れないとしたら，その方がどうかしている。ありとあらゆる分野の本があるようで，実は求めている本が常に得られるわけではない。過剰のなかの貧困の非文化的現実である。雑本いや雑小説もあまりにも多いのではないか。

さて，何を読むべきか。明治百年の昭和四二年十月十日付けの毎日新聞に寄せた稲垣達郎氏の「明治百年十大名作」は，それに対する有意義な参考意見である。その十篇は，夏目漱石『明暗』，二葉亭四迷『浮雲』，徳田秋声『あらくれ』，森鷗外『渋江抽斎』，永井荷風『断腸亭日乗』，谷崎潤一郎『細雪』，島崎藤村『破戒』，葉山嘉樹『海に生くる人々』，志賀直哉『暗夜行路』，有島武郎『或る女』。この選択が明治・大正文学重視に傾いていること。物故作家ばかりで戦後派作家が一人もおらぬことなどに問題が残るにせよ，これらの作品が近代・現代文学屈指の問題作かつ傑作であるという評価は末永く不変であろう。もとより十篇というワクにこだわる必要はなく，各人，藤村なら『夜明け前』，荷風なら『腕くらべ』というように差し替えてもよいが，まずは学生時代に読了しておきたいものである。小田切進『日本の名作』（中公新書）の六二篇のなかには上記十大名作が八篇掲出されている。テーマ別名作案内書の中村真一郎『この百年の小説』（新潮選書）と臼井吉見『小説の味わい方』（新潮文庫），文学史的視座からの中村光夫『日本の近代小説』『日本の現代小説』，文体論的な野間宏『文章入門』（青木文庫）等が作品鑑賞の一助となろう。文庫本の解説は要注意。いわでものことながら，自分の感性・視角によって作品の内質の真実性を感得しなければならない。相当数の作品を読めば当然問題意識がうずいてくるはずだから，作品論や文学史の本を読むべきだ。伊藤整『近代日本の文学史』（光文社），平野謙『現代日本文学入門』（要選書）・『わが戦後文学史』（講談社），本多秋五『物語戦後文学史』（新潮社）等が作家・作品認識を深め，文学・社会・歴史の相関関係についての関心にテコ入れしてくれるだろう。

最後に，以上の諸書に付随して読むべき本は多いが，とりわけ河合隼雄『無意識の構造』（中公新書）か福田宏年『永遠と現実』（講談社）の一読をおすすめしたい。そして，欲を出してユングの『人間のタイプ』（日本教文社）を――。

日本語学へのいざない

佐　藤　宣　男（日本語学）

人々の語源に寄せる関心は昔から強いものがあった。風土記の地名起源説や竹取物語の各説話の後にある語源説（たとえば，「甲斐あり」を「貝―燕の子安貝―あり」の意とする）などがそうである。今日でも，語源関係の書物はよく出版されている。大言海の語源の説明は，学生諸氏の興味の対象となりやすいようで，演習の時間などによく話題となる。これは読み物として読んでいる分には，なかなか楽しいものであるが，頭から鵜呑みにするとなると問題が生ずる。今日では，その多くが疑問をもたれているからである。語源は，ある程度まではさかのぼれても，窮極までは至りがたいものである。今日では一語と考えられている「鍋」は，「な」（副食物の総称）と「へ」（瓶（かめ）の類）との複合語と説明されている。しかし，「な」「へ」の語源はということになると，全く不明というほかはない。かつての音義説（語の一音一音が特定の意味をもつとする語源説。たとえば，「山」は，ヤ＝高き義，マ＝褒むる義，と解する）は，今日では承認しえない。日本語学の立場からは，結局『日本語語源学の方法』（吉田金彦著，大修館書店）に示されるものが，その限界であろう。その先に進むためには，どうしても比較言語学の方法を借りて，日本語の起源・系統を明らかにしていく過程の中で行われねばならない。

日本語起源論・系統論も，よく世上を賑わしかつての安田徳太郎のレプチャ語起源説（『万葉集の謎』光文社）や近時の大野晋のタミル語起源説（日本語の世界１『日本語の成立』中央公論社）は著名である。これらはマスコミの大きくとり上げるところとなり，世にもてはやされたが，また多くの批判も提出された（大野説については，たとえば，村山七郎『日本語の起源をめぐる論争』三一書房，辛島昇「日本語＝タミル語起源説についての私見」ＵＰ102号　昭和56年４月）。日本語は，その起源・系統を明らかにしがたい言語の中の最たるものと言われており，エジプト語起源説・ギリシヤ語起源説など奇想天外な説が出されるなど，きわめて特異な存在である。日本語起源論・系統論は，あくまでも一つの試み・仮説としての限界を免れぬものであり，批判的にうけとめることが肝要である。あるいは永遠の謎として終ってしまうものなのかもしれない。

語源論，起源論・系統論に比べると興味をもちにくいかもしれないが，日本語の歴史（国語史）にも関心をもってほしいものである。平凡社の『日本語の歴史』（全七巻，別巻一）は，読みやすいものなので推薦しておこう。『岩波講座　日本語』（全十三巻）や『講座国語史』（全六巻，第四巻未刊　大修館書店）は，最近の研究成果をふまえた，各分野の紹介で，自分の興味に随い選択して読むとよかろう。

12月から貸出取扱時間が長くなります

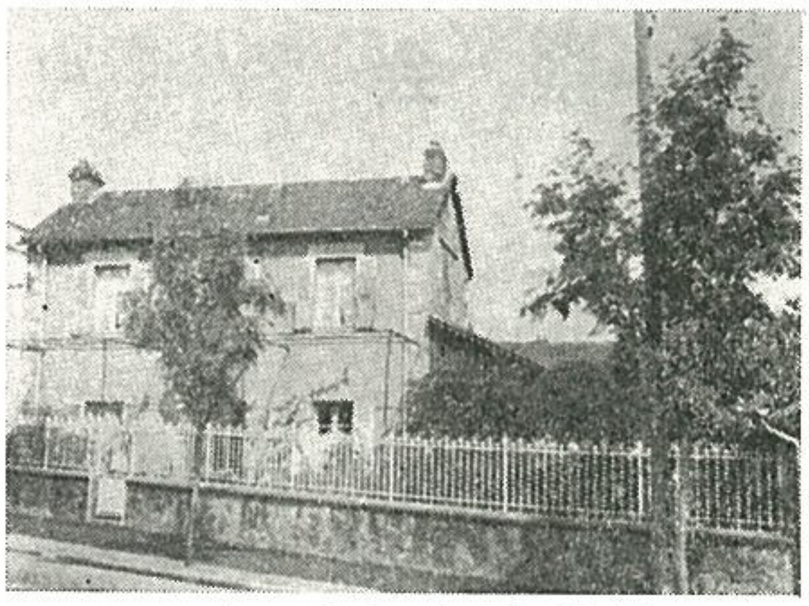
貸出時間　9：00―16：30
貸出中止　11：00―12：00
一夜貸出　16：00―翌日10：00
土曜日は従来どおりです。

ガイダンスを受けましょう!!

毎週火・木曜日午後，調査案内カウンターにて
○辞書・索引・書誌など参考図書の使い方
○雑誌記事論文の探し方
○卒論・レポート作成のための資料収集法
○各科別の図書館利用法の説明，等々
資料を揃えておきますので事前に申込んで下さい。個人でもグループでも受付ます。

リモージュへの旅
―― 藤村の跡を訪ねて ――

藪　禎子（国文学）


リモージュの止宿さき（二階右側の窓が藤村の居室）

ひそかな夢が実現した。リモージュの街はずれ，バビロン道，下宿跡，そしてエドワール・マッテラン氏，すべてが心にしみる一日だった。

藤村のフランス滞在は1913年から16年までの丸3年である。もう60数年も前の事だし，その間2度の大戦もあった。日本の感覚から言えば，足跡などどれ程たどれるか覚束なかった。出会えたら僥倖ぐらいに思っていたのだが，パリでまず見事に裏切られた。ポール・ロワイヤルの下宿については，伊東一夫氏の探訪記（『風雪』創刊号 1976. 10）が既にあるが，アベラールとエロイーズの墓，その他藤村の著述に散見する建物，街角，カフェなどまでが，旧知の如き親しさで眼の前にあったのである。

マッテラン夫妻　（1981年夏）

リモージュでは，それが一層身近なものとなった。「新生」および新生事件の藤村については，批判的な議論が多い。しかし，私は，〝新生〟は確かにあったのだと単純に信じている一人である。その回生の契機になったのが，第一次世界大戦とリモージュである。戦争による死の傷みの中から新しく甦ろうとしていたヨーロッパに，藤村はみずからの命の回復を重ねようとしていた。しかし，それも，リモージュでの2カ月半がなかったら，実際には無理だったかもしれない。もともとは戦火を避けて落ちのびた地だったが，この古い街の自然と人が藤村の心を癒し開かせて行った跡は，書簡，手記などに歴然と読みとれる。滞りがちだった創作の筆が本格的に動き出したのもこの地である。

その拠点となったマッテラン家の二階の一室が，今も往時のまま使われている。番地と所有者が変わっていて，ここに至りつくまでずいぶん手間どったが，行きついてみると，家全体の間取りも庭も，藤村が書き記しているままのものが現前して，時間と距離の遠さがむしろ不思議なくらいだった。もっとも尋ねあててみて始めて昨年佐々木雅発さんがここを訪ねておられた事を知り，あとでまたその佐々木さんが『朝日新聞』（1980. 11. 14 夕刊）に書いておられたのを知った。私の大きな見落としだったわけだが，それにしても同じ思いに引きずられていたわけで，それだけに行きあたった喜びは大きかった。

この家で藤村が親しく接した少年エドワールも，同じリモージュの別の地に健在であった。藤村が〝私の友人〟と語り，微笑ましい交流に屢々ふれている人物である。彼はもう82歳になっている。しかし，ボケとはおよそ縁遠い堂々たる老紳士であった。ムッシュー・シマザキとの日々は，その彼のうちに今なおはっきり刻まれている。広い庭にのぞむ書斎の椅子で，「彼はボンノムだった」と大きくうなずきながら語るエドワール・マッテラン氏の言葉に，私は何かしら熱いものが走るのを覚えた。新生事件の闇の深さと，いゝ人であった藤村と，ここには人間の生の哀しさがのぞいて見える。

座談会

『図書館』を語る

牧野美枝（英文学科　4年）
高島琴美（国文学科　3年）
佐藤登美子（英文科　2年）
鈴木操子（家政科食物栄養コース　1年）

図書館　夏休みに入り，皆様いろいろ御予定がおありのところ，集っていただきありがとうございます。今日は，日頃皆さんが図書館をどのように利用していらっしゃるのか，気軽にお話していただきたいと思います。

牧野　今年は卒論があるのでよく利用しています。雑誌の目録を使って資料を調べたり，書庫が解放されたので洋書の方もよく行くようになりました。あとは，趣味の本を眺めたりもします。

高島　だいたいレポートを書くときに多く利用しますが，雑誌を見たり好きな作家について調べたり，買うまでもないような最近の作品を読んだりします。

高島さん

佐藤　私は一年の頃は，書庫に入れなかったのであまり図書館には来ませんでした。二年になって使いやすくなり，よく利用しています。レポートのときとか，卒論はありませんが好きな作家の作品を調べたり，あとは雑誌・趣味の本を見たりすることが多いですね。

鈴木　何といっても，食物栄養科はレポートが多いので，専門的なものを調べるのにとても便利です。そのほか，皆さんと同じように趣味のものとか，今まで興味のなかったものも見るようになりました。

図書館　今年度から，書庫が解放され，ほとんどの資料を直接手にとって見られるようになって，利用回数がふえたようですが……。

佐藤　以前は，手続きが面倒で書庫に何があるかわからなかったのですが，自由に見て歩けるようになってから，知らなかった分野のものも関心をもって見たりしています。

牧野　カードを見るだけでは内容も個々の作品もよくわかりませんし，やはり手にとって見なければ……。

牧野さん

高島　今迄も，キャレルのガイダンスを受けて書庫内は頻繁に利用していました。二年かかってだいたい把握したところで，突然配置が変わって，使いにくくなったように感じたのですが，ようやく少し慣れてきたところです。

図書館　鈴木さんはいかがですか？　まだ入学なさって半年足らずですが……。

鈴木　まだあまり利用しているわけではないのですが，資料の多いのには驚いています。専門書のコーナーは毎日のように使うので，資料

の場所はだいたい覚えました。

図書館　皆さん直接本にあたっているようですが，目録カードは使いませんか？

牧野　目的の本がはっきりしているときは，まず書架に直接行き，見当らない場合は目録を見ます。

図書館　貸出中の方が多いこともありますしね。

高島　目録はよく使っています。特に全集中に含まれているものなど調べるのに使います。

佐藤　私は自分の意識している作家については詳しく調べますが，あまり見ない方です。

鈴木　ある本を読んでいて，引用されている本をさらに読んで見たくなることが多いのですが，そんなとき目録で探すことはあります。

鈴木さん

専門分野の本はほとんど書架上を見て探しています。

図書館　取り出した本は，それぞれ元の場所に戻していただくようになりましたが，馴れましたか？

佐藤　背のラベルを見て入れていますけれども，とまどうこともあります。

牧野　私も最初はわかりませんでしたが，ラベルを見ることを教えていただいてから楽に戻しています。

図書館　実際に読みたい本を探しても，図書館に入っていない場合があると思うのですが，自分で買いますか，それとも購入希望を出しますか？

牧野　申し込んだこともありましたが，絶版の本で，古本で高額だという理由で駄目でした。

佐藤　どうしても欲しいものは，自分で所有したいという気持もありますし……。

高島　一度購入希望を出したことがあるんですけれど，断られてしまいました。入れるとか入れないとかの基準はどんなところにあるのですか？

図書館　なるべく希望にそう方向で考えてはいます。館員3名から構成されている選書委員会で，学科構成・利用状況・予算等を考えて決めます。ベストセラー・話題作等も積極的に入れるようにしていますが，予算枠が限られていますので専門分野の大きく異なるもの，高額なものは無理なこともあります。昨年は希望が63件でそのうち60%は買っています。残りの20%はすでに入っていたもの，あとは予算の関係などで見あわせたりしたものが20%です。入手困難なものは可能なかぎり他館から借りたり，複写等で希望にそうようにしています。

佐藤さん

高島　私は筒井康隆の本を希望したのですが，ベストセラーの類は入れないということで駄目でした。筒井の本がないのは残念だと思うのですが……。

佐藤　文庫本は全体的に少ないのではないでしょうか。手軽で読み易いので増やして欲しいし，もっとあっても良いという声をよく聞きます。

図書館　話題が蔵書構成の方に移ってきたところで，本の量や質についてはどうですか？

牧野　英文科なので英文学関係のことしかわからないのですが，洋書の方は揃っていると思いますが，邦文の参考書が少なくレポートを書くとき少々不便を感じています。

図書館　確かに，英米文学関係の和書はもとのゼミ室の一室に，それも一部しかありませんね。

牧野　原書の方は私達が読む位だったら十分と思います。活用するしないはこちらの問題ですし……。

高島　レポートを書くとき指定図書をよく使いますが，多くの人が一冊に集中するのでなかなか大変です。複本があればもっと利用できる

と思いますが……。

図書館　指定図書は一夜貸出のみに限っており，多くの方が利用できるようにしています。若干，複本もありますが，今後全般的に考えなければならないですね。

高島　関係の学部がないのでやむをえないのかもしれませんが，自然科学関係の本が少ないですね。それに洋書でも現代作家の読みやすいものや軽いものなどをもっと揃えていいと思います。専門科目でなくても一般的な興味を持つこともあるでしょうし……。

社会科学関係の本は好きで読むのですが，最近話題になっている社会事情などを扱ったものなど，もっと入れて欲しいと思います。

佐藤　なかには，何時行ってもない本があるのですが……。

図書館　予約はしなかったのですか？　簡単な手続きで済みますので，是非なさってみてください。書名を調べて，貸出カウンターの係に話すだけですから。

鈴木　やはりレポートを書くときなど借りたい本に利用が集中するので，もう少し複数揃えてほしいと思います。

図書館　貸出のときに多いものや予約が常にあるものは，複本を揃えるなどいろいろ考慮しますが，利用する皆さんも最大限に使いたいという意志表示をして欲しいですね。単行本以外でも，ほかの叢書・類書で間に合う場合もありますので，私どもにどしどし尋ねてください。今年からは調査案内カウンターが独立しましたので，そちらの方も利用してください。

高島　今迄あまりわからなかったものですから……，これから利用したいと思います。

図書館　ほかに皆さんの方から何かありましたらこの機会にどうぞ。

牧野　図書館に案内図があるとよいのですが，館内の模様替えのたびに迷ってしまいます。

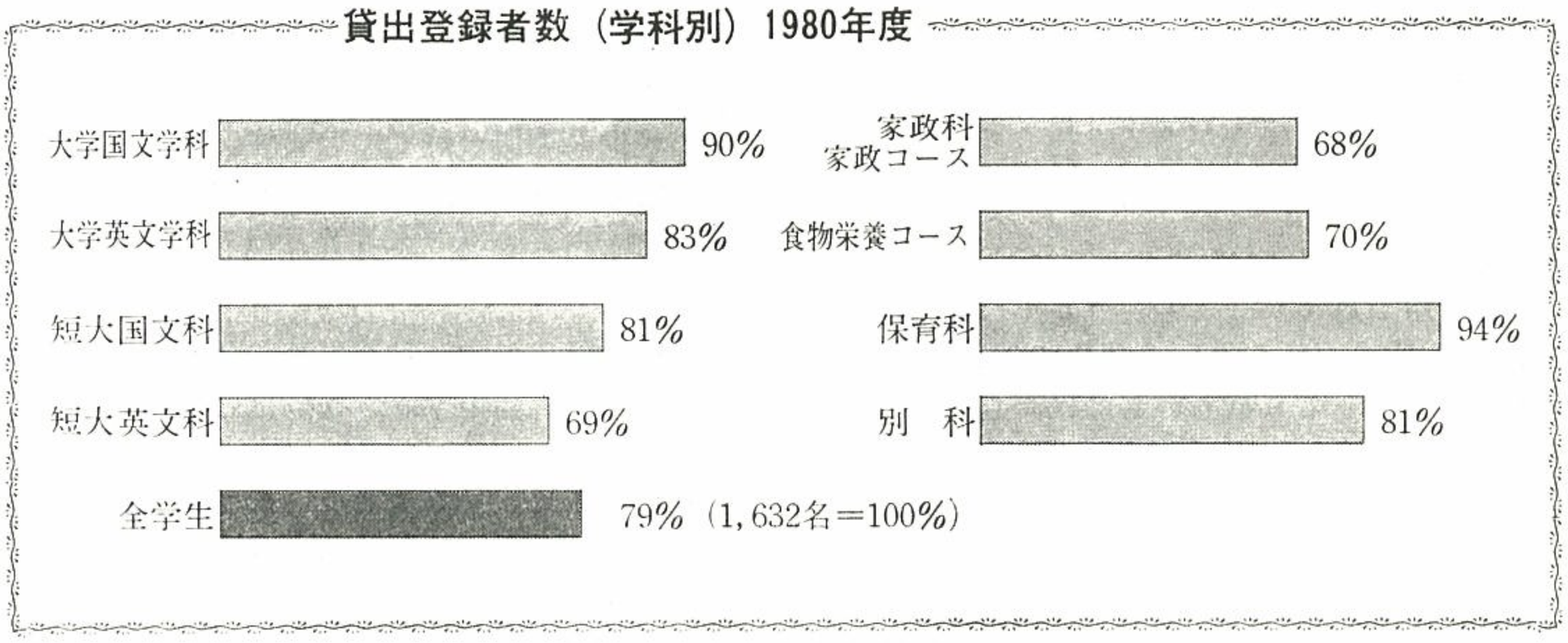
図書館　目につくところに掲示しているつもりですが，わかりにくいのでしょうか？

牧野　どの分野の資料がどこにあるのか一目でわかるような全体の案内図がほしいですね。

高島　和歌関係の並んでいる付近は，ことにわかりにくいですね。

図書館　スペースが狭くなって無理な資料の流れになっているところがどうしても出てきてしまうのです。今後，皆さんの意見を参考にさせていただきます。まだいろいろお聞きしたいところですが，このへんで終らせていただきます。これからも図書館に対して，皆さんの方からもっと積極的に働きかけて欲しいですね。どんなささいな質問でも，また，希望なども遠慮なく寄せてください。今日は，長時間ありがとうございました。

（誌面の都合上，全部掲載できなかったことをおわび申し上げます。）



資料紹介

Bibliothèque de la Pléiade（プレイヤード叢書）(Gallimard)

落合健一（哲学）

藤の英文学科卒業生で，その後パリーで勉強し，「フランス人以外の人にフランス語を教える」資格を正式に取得し，フランス人と結婚し，今パリーの日本人学校でフランス語を教えている人がいるが，夏休みに札幌に帰省していた。彼女は，自分は英会話は苦手（本当だろうか？）だがフランス語の方が易しい。リエゾン等があるので一連の語が一つながりとしてすぐ頭に入ると言っていた。だが音と文字との対応はやはり難しいので，自分は別のものとして覚えると言う。「読む」時には文字を「見る」，発音しない。そうした場合に，作家はただ書いているのではなく，緻密な計算の下に実に巧みに語を選ぶものだという事がわかると言っていた。

昨年から図書館で揃え始めたプレイヤード叢書は質の高いものである。注釈や参考文献が実に詳しく信用できることは驚嘆に価する。また装幀が美麗で紙の感触も良いので，フランスではプレゼントとしてよく使われるらしい。写真も絵もなく，見易いとはいえ細かな文字のぎっしりつまった書物だが，読書好きの人の間ではこのプレゼント大いに悦ばれるそうだ。この書物は結構高価なのでフランスでは同時に3冊買うと特製の薄い書物を1冊おまけにくれる。これがまた結構おもしろい書物で，誰か作家の伝記を豊富な写真を中心に編集したものである。これは年に1冊出るものらしいが，藤大図書館には今のところボードレールなど数点が入っている。

先頃オタワで先進国首脳会議があった時，開会前日ミッテラン大統領がプレイヤードの1冊を小脇にかかえてイタリアのスパンドリーニ首相を訪ねた時のこと，そこで早速2人はクァトロチェント（15世紀イタリアルネサンス）文化論を闘わしたという。その時のプレイヤードは一体何の書物だったのだろうか。

S. THOMAE AQUINATIS OPERA OMNIA　7vls curante Roberto Busa S. J. (Frommann-Holyboog 1980)

鈴木高明（図書館）

本書は最新の聖トマス全集である。聖トマスは，イタリアの貴族の家に生れ，ドミニコ会士となり聖アルベルトゥスに師事した。後にその学徳により，中世の光輝と称えられる。

聖トマスは，キリスト教と古代文化を総合した大きな思想を育てあげたが，それはプラトン的な表現を持つキリスト教思想とアリストテレス主義の結合とも言える体系であった。聖トマスの特色は，理性と信仰との明確な区分とその自然な調和であり，また自然を完成するのは神の恩寵として，哲学と神学の役割に秩序を与えたことなどとされている。

主著 Summa Theologica（神学大全）を始め大部の著作は，アリストテレス註解・聖書註解体系的著作，小著作に大別され，スコラ学の柱であるとともに，何世紀にも及び人文学全般に多くの影響を残している。

この大部の著作と真偽不明など他の著作若干を加え，中世ラテン文献179を対象とし，著作中の全語彙を電算機に入力し，全文献中の単語，熟語，同・異義語，複合語などの詳細な言語分析を行い，要語総索引を作る世紀的な作業が国際協力で続けられ，50巻の大冊で出版される。

今日紹介する全集は，この作業より誕生したもので，総索引の補巻でもある。完全な文献考証と言語分析を経た179論文を収め，過去に定本とされていたレオ版を基礎に，考証，校訂を更にきびしく整え，電算機作業の結実でもある異版相互検索のための対照表も加えられた。

全集として質も規模も他に例を見ない。聖トマス研究は，新しい角度より問いなおされ，近時その社会思想や人間観をも対象として活発である。地味ながら機を得た出版であろう。館所蔵の聖トマス関係和洋200冊の資料の中核が固められた印象が強い。

本あれこれ

〝モルガン〟と〝マリノウスキー〟と私

飯　村　しのぶ（家政学）

大学の1年か2年の時，一般教養科目として史学の講義をうけていた。先生はたいへん個性的であり，深く落着いた雰囲気の中でありながらしかも情熱的な授業であった。少しオーバーな表現でいえば，学問の世界に私も拙いながらも第一歩を踏み入れたといった，そんな気さえしてくるような時間であった。週に一度のその授業がいつも待ち遠しく思われた。

冬だったと思う。どういう繋がりでだったかは忘れてしまったが，その日は，エンゲルスの『家族・私有財産及び国家の起源』を中心にした講義であった。先生は，モルガンの『古代社会』に於て展開されている人類姻婚史を，家族・国家に敷衍したものとしてエンゲルスの『起源』が生まれたのだといったようなことを説明された。周知のとおり，モルガンは人類の婚姻史に於て原始には乱婚状態があり，やがて血縁婚→半血族婚→対偶婚といった形態を経てこんにちのような一夫一婦婚に到達したのだとする立場である。当時の私はまったく漠然と，人間にとって永久不可欠のものとは〝生命〟と〝家族〟ではないか，などと考えていたので，その〝家族〟の発展史の最初の段階にグループ=マリッジが存在したとする説は，それこそ〝家族〟の根本をくつがえすような気がして非常な驚きであった。

一方，この授業とちょうど同じ時期に倫理学の授業もうけていた。これもまたおもしろい授業だった。老練な先生のノートはまさに黄色く色褪せていたが，私はその分だけさらに授業の内容にひきつけられていくようだった。やがて倫理学のレポート作成のため，和辻哲郎の『倫理学』上巻を手にとった。なんとその「第三章：人倫的組織」には，先のモルガン等の家族発展段階説は「根拠なき仮定」であるとして，「彼は現実に存する群婚をどこにも発見できなかったのだ」と批判されているではないか。さらにマリノウスキーのトロブリアンド島に於ける実証研究によれば，一夫一婦制こそが人類の最初からの形態であると説明されていた。

私はここで初めてモルガンとマリノウスキーという相反する二人の名前を知った。そうしてイデオロギー的にどうこうといった問題よりも絶対的存在であると考え，何ら疑うことのなかった〝家族〟その発達の歴史に相異なる見解があるということの発見の方がおそまきながら私の未熟な情熱心を刺激したようだった。それ以後私の疑問は具体的形をとった。これらに関する書物を図書館や本屋でみつけると必ず読まなければならないと思ったし，むしろ新しい本たちは私の目に止まるのを待っているかのような気さえしてくるようだった。やがて4年になり卒論を書く折には，きっとこのモルガンとマリノウスキーの比較研究にはじまって，〝人間にとって家族とは何か〟という大テーマにせまってやろうと決心し，この時以来ノート作りを始めた（結局，荷が重すぎ卒論は違うテーマになったのだが……）。まるで日記に秘密を記すように，私はこのノート作りをしながら微かながらも心の震えるような思いがしていた。今でもその時特別に作ったノートは，数回の身辺整理の際にも捨てられず大切にしている。これが現在，私が家族や生活問題の一端を研究対象にしている一つのきっかけになったと思う。

人は誰でも，心の中になにかしら自分の帰るべきところを持っているという。あの頃の情熱的な探求心は今の私にあるだろうか。気持の落込んでしまった時，あるいは次の課題への空白の時，私はこのノートをひろげて，再び情熱をふき返そうと試みることが少なからずある。

地下食堂からの伝言

礒貝道子（食堂）

私の職場は11名で，そのうちの2名が栄養士である。学園食堂も15年目を迎えた。その間，私達の食生活も少しずつ変化しながら今日に至っている。

例えば，米の消費量は以前1人100g だったのが，現在では70g以下になっている。しかし白飯は苦手のようだが，味のついた御飯やピラフは嗜好調査では上位にある。

今はほんとうに食品の種類も量も豊富であるし，所得も伸びたが，また食材料費もざっと3,4倍になっている。レタスやセロリのような洋野菜が日常の食卓にのぼり，輸入ものの冷凍のコーンやグリンピースが年中出まわっていて，これは価格も安定しており味もコンスタントでおいしい。肉にしても鶏肉，豚肉があり，牛肉も時として食堂の献立に登場している。10年前を思うと物質的にはほんとうに豊かになったと思わずにはいられない。しかし反面，季節の節目が不明瞭になり，旬のものを味わう喜びが薄れつつあるとも言えよう。

このような食生活の変化は経済的な理由によるだけでなく，人間の持っている進取性（今よりも良いもの，新しいものに対する好奇心）と保守性（慣れたものに対する愛着，例えばステーキとライスがレストランで出される）とが組み合わさって少しずつおこってくると言われている。

私達も学生の嗜好の変化をみながら献立の多様化に応じていかなければならない。料理の本も数多くあるが，「食生活」「栄養と料理」「臨床栄養」「NHKきょうの料理」「奥様手帳」などの雑誌も参考に，すべての料理を作ることはできないが，日頃から料理名と材料のイメージを結びつけておき，レパートリーに厚みをつけるように心がけている。そして献立決定の際には，味付けなどのアレンジや予算や手順も考えながら，栄養，色彩共にバランスのとれたおいしい食事になるように献立用紙の上で仕上げていく。

ところで，学生の希望する献立をといつも頑張ってはいるのだが，料理の高級化と洋風化にばかり目が向くと，どうしても肉類が多くなり脂肪を取り過ぎる傾向になってしまう。反面，女子大生も例外ではないが，間食が多く定まった時間にきちんと食事をしないため動物性食品の摂取量が少なくなり，これが原因で貧血症になる例もある。女子の26%が鉄欠乏性貧血だそうであるがこれは回復するのに大変苦労する。

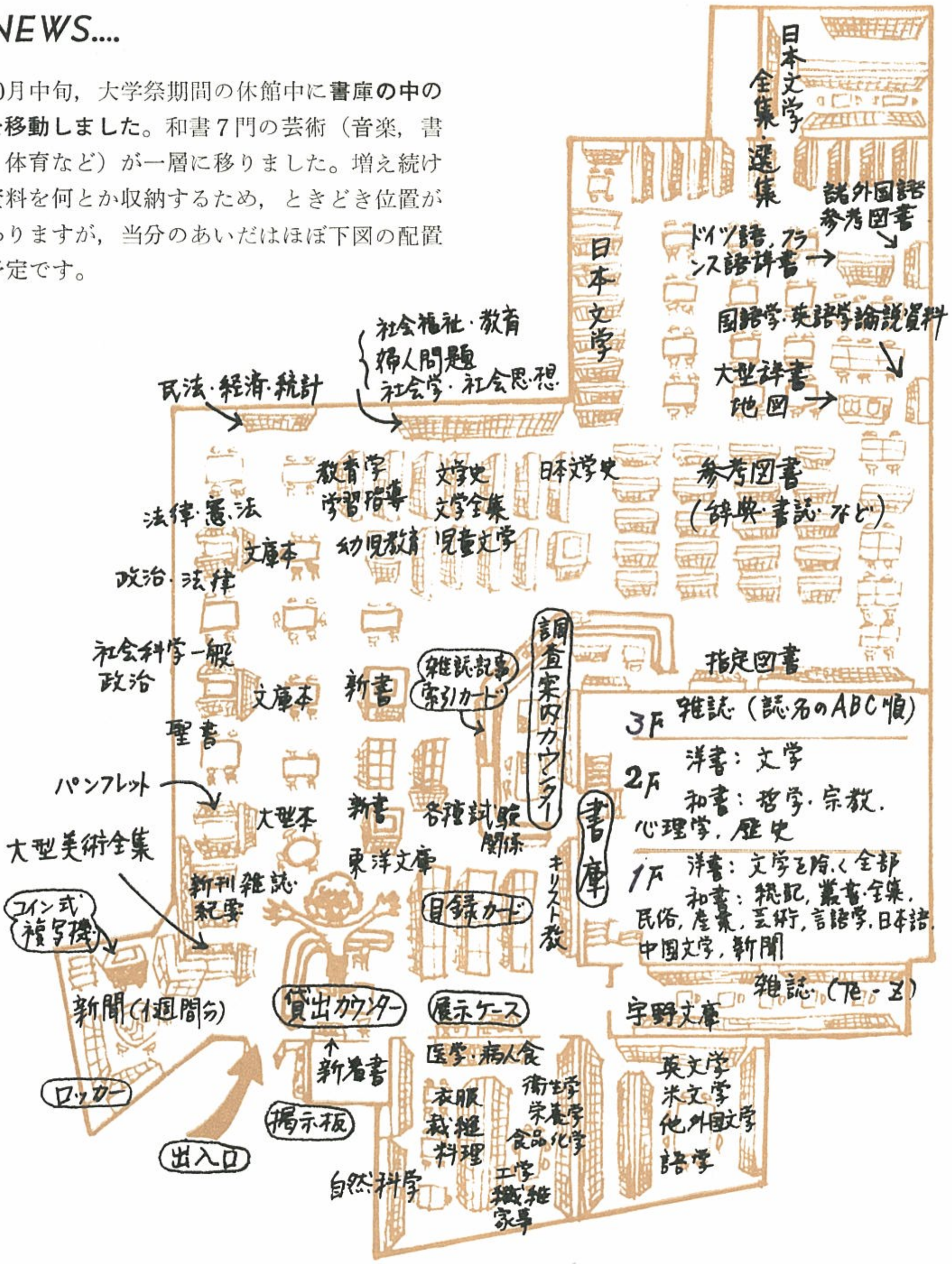
私達の食堂は1日のうち1回，昼食のみではあるが，毎日の食事を大切に，バランスのとれた食品を取れるよう，日本人に不足ぎみなカルシウムや緑黄色野菜も補なえるよう，また成人病の下地となる砂糖や塩分もとり過ぎないようにといろいろな点に注意しながら献立を考えている。

最近中央で開催された講習会に参加した。栄養士業務としての栄養改善や指導のほかに，外国との係わりと食糧についても考える機会を与えられた。日本は外国から大量に輸入している食糧（飼料穀物も含めて）で生活しているのが実情である。しかし異常気象による不作や将来の人口増加，さらに食糧が戦略物資となる可能性や石油供給のストップなども予測し，また健康維持という点から見ても米を中心とした食生活を見直さなければならないという内容の講演であった。農業白書，80年代農政の基本方針，農政ジャーナリストによる本を読んでみても，将来は必ずしもバラ色ではないようだ。

いつまで私達は豊富な食糧にかこまれて生活ができるのかしらと考えると不安に思う。少々飛躍しすぎ臆病すぎるにしても現実にならないでほしいと思わずにはいられない。

NEWS....

★10月中旬，大学祭期間の休館中に**書庫の中の本を移動しました。**和書７門の芸術（音楽，書道，体育など）が一層に移りました。増え続ける資料を何とか収納するため，ときどき位置が変わりますが，当分のあいだはほぼ下図の配置の予定です。



藤女子大学
藤女子短期大学　図書館だより　第14号　1981.12. 1. 発行
発行者　札幌市北区北16条西２丁目　藤女子大学図書館
印刷者　札幌市東区伏古８条２丁目　天使院印刷製本部